ふるさと御所
文化財探訪

⌘其の四十六⌘

古墳時代〈34〉
巨勢（許勢）氏の台頭（6）
條ウル神古墳の被葬者像②

文化財課
☎60-1608

條ウル神古墳の被葬者像を解く手がかりの一つは、近くにある巨勢山６４０号墳（通称：條池南古墳）の横穴式石室に納められた、二上山白色凝灰岩製の刳抜式家形石棺の棺身です。棺身内面の片側の小口は彫り残して１段高くなっており、その中央部をほぼ円形に、深さ７cmほど彫り込んで、被葬者が頭部を乗せるための、造り付けの石枕としています（図１）。

図１　巨勢山 640 号墳の棺身（條池南古墳）
（写真提供　奈良県立橿原考古学研究所、一部改変）

このような造作を伴う家形石棺は大変珍しく、現在２例しかないのですが、実はもう１例こそが巨勢谷に所在する樋野権現堂古墳の石棺（図２）なのです。この石枕を伴う石棺も二上山白色凝灰岩製で共通しており、このことは條地区の古墳が巨勢谷の古墳と親密な関係にあることを示します。

もう一つの手がかりは、かつて河上邦彦さんが指摘した、巨勢谷の横穴式石室に共通する特徴です。それによると他の地域では玄室の奥壁幅：側壁の比率が１：２程度であるに対して、巨勢谷の石室には１：2.4から１：2.8となるものが多く、要するに巨勢谷の横穴式石室の玄室は、その平面形が他の地域に比べて狭長だ、というのです。図３は石室の平面図をそれぞれ任意の縮尺で縮小し、重ねられたものですが、市尾墓山古墳から新宮山古墳に至るまで、確かに相似形になっています。これに赤線で條ウル神古墳を重ね合わせてみますと、平面では見事に合致することがわかります。

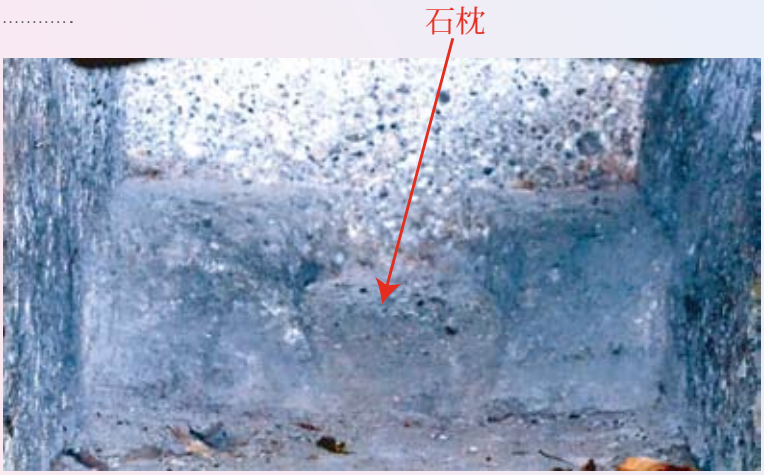

図２　樋野権現堂古墳の棺身の石枕

河上さんは巨勢谷の横穴式石室のもう一つの特徴として、羨道が入口に近づくに従って次第に高くなることも指摘しておられます。條ウル神古墳の羨道にもやはり同様の特徴があり、ここでも共通します。

石棺・石室共に條ウル神古墳は巨勢谷の古墳と共通の特徴を多く有します。このことは條ウル神古墳の被葬者は巨勢氏の盟主のいずれかである可能性が極めて高いことを示します。

條ウル神古墳の築造は６世紀の後葉と見られます。日本書紀に登場するこの時期の人物に巨勢臣猿という人がいて、この人が生前から古墳を造り始めていたとすれば條ウル神古墳の被葬者の可能性があります。日本書紀には任那再興の大将軍の一人として筑紫（福岡県北部）に出陣した、とあります。ただし、後の時代に作られた『紀氏系図』などには巨勢胡人なる人物も見られますので、巨勢氏の誰か、ということ以外は被葬者の特定は難しいかも知れません。

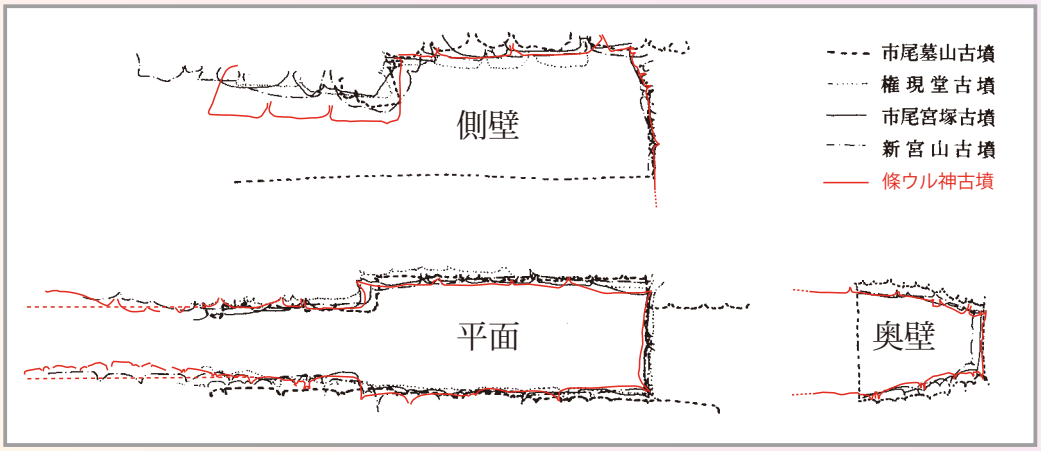

図３　巨勢谷の横穴式石室と條ウル神古墳（赤線）

【参考文献】
御所市教育委員会編『古代葛城とヤマト政権』、２００３年、学生社

（文責　藤田 和尊）

★住宅用火災警報器が大切な「命」・「財産」を守ります。全ての住宅に設置義務化されています。